

異性愛者白人男性



セカンド・ステージ・シアター制作『ストレート・ホワイト・メン』公演終了後、スター俳優のアーミー・ハマー氏を囲むファンたち

「戯曲家ですよ、サインしてもらえますか?」と劇場で声をかけられることにも、随分慣れてきました。セカンド・ステージ・シアター制作のザ・ヘイズ・シアターで現在公演中の演劇『ストレート・ホワイト・メン』は、ヤング・ジーン・リー氏作、アンナ・D・シャピエロ氏演出による演劇です。女性アジア系アメリカ人による戯曲をブロードウェイで上演することが歴史上初であるように、ニューヨークの演劇業界で活躍するアジア人の数は多くなく、特にブロードウェイは白人男性社会と認識されています。この作品の制作チームにおいてもアジア人は韓国生まれのリー氏と日本人の私の2人だけでした。この公演の照明デザイナー、ドナルド・ホルダー氏の横で助手である私が彼の指示をノートに書き出していたら、「公演のメモを取っているから戯曲家かと思った」と客に声をかけられました。リー氏と私の容姿はまったく似ていませんが、年齢があまり変わらないこともあり、メディアを通してしかリー氏を知らない西洋人からしたら私と見分けがつかないのかもしれませんが、丁重に否定する私に、ホルダー氏は「もういい加減『はい、私が戯曲家です』って言っちゃってもいいんじゃない?」と笑いました。いや、それはさすがに無理です。

『ストレート・ホワイト・メン』は白人の父親と息子3人がクリスマス休暇に実家に集まった3日間を描いた3幕の演劇です。息子たちはすでに成人で、彼らの母親は亡くなっていません。銀行勤めの次男と学校の先生で作家の三男はそれぞれのキャリアを構築しましたが、ハーバード大学の学士をもつ長男は奨学金の返済苦を言い訳に実家へ戻り、父親のために家事を手伝いながら地元のNPO団体で期間限定の仕事をしています。コンピューターゲームに熱中したり、テイクアウトの食事やスナック菓子のファミリーパックを容器から直に食べたり、男兄弟ならではの「あるあるネタ」は観客の笑いを誘います。90分の上演中8割は爆笑コメディと言えますが、家族は長男を「落ちこぼれ」と断定し、長男を心配して助け

ようとする兄弟と父親の空回りが話の筋となっています。キャリアに興味がなく「人の役に立ちたい。家事手伝いは人生で初めて人の役に立っている実感がある。」と主張し、妻を亡くした父親の面倒を見る長男の行動が、次男と三男には理解できません。白人男性なのにどうしてビジネスで成功せず、有色人種や女のようなお手伝いの立場を望むのか、と長男を責める次男と三男は、長男を通して白人男性の特権が崩れかけていることを知り、それを恐れているように見受けられます。

ストレート=異性愛者、ホワイト=白人、メン=男性は、長い間西洋社会の“スタンダード”とされてきました。劇中でも「職場には優秀な女性や有色人種がたくさんいる。でも大事な打ち合わせには必ず白人男性の社員ばかりを連れて行くのは、クライアントがそれを望んでいるからだ」という銀行勤めの次男のセリフがあります。また、ザ・ヘイズ・シアターで働く大道具、小道具、音響のスタッフもほとんどが白人男性です(照明だけは白人男女の比率がほぼ等しいです)。それが近年、マイノリティーとされてきた人種やLGBTQの人権を尊重する風潮が高まり、以前の“スタンダード”が他と肩を並べた一ジャンルとなりつつあります。ストレート・ホワイト・メンの特権ばかりが目立ってきましたが、彼らだからこそ得られない人生の選択もあるのかもしれません。

「もし私が朝起きたときに白人男性になっていたら」を想像したことが、『ストレート・ホワイト・メン』の執筆の始まりだったとリー氏は話しました。戯曲を通して、社会を今までと違う目線で見たら何が見えますか、と客に問いかけます。その証拠に、リハーサルとプレビューで繰り返しこの演劇を体験することで、登場人物に対する見方が日に日に変わってきたことに気がつきました。それはこの演劇が長く客の心の中に生きる証拠で、私たちはこの戯曲が投げかける疑問に対する答えを探し続けることでしょう。